水平線がまぶしくて

矢部美智代・作　中村悦子・絵

水平線がまぶしくて

矢部美智代・作　中村悦子・絵

わくわくライブラリー

水平線がまぶしくて

1990年8月20日　第1刷発行

定価1100円(本体1068円)
著　者　矢部美智代
発行者　野間佐和子
発行所　株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21(郵便番号112)
電話　東京03(945)1111(大代表)
N.D.C.913 198p 22cm
印刷所　豊国印刷株式会社
半七印刷株式会社
製本所　島田製本株式会社

©Michiyo Yabe 1990　Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。
送料小社負担にておとりかえします。なお、この本について
のお問い合わせは児童図書第一出版部あてにお願いします。

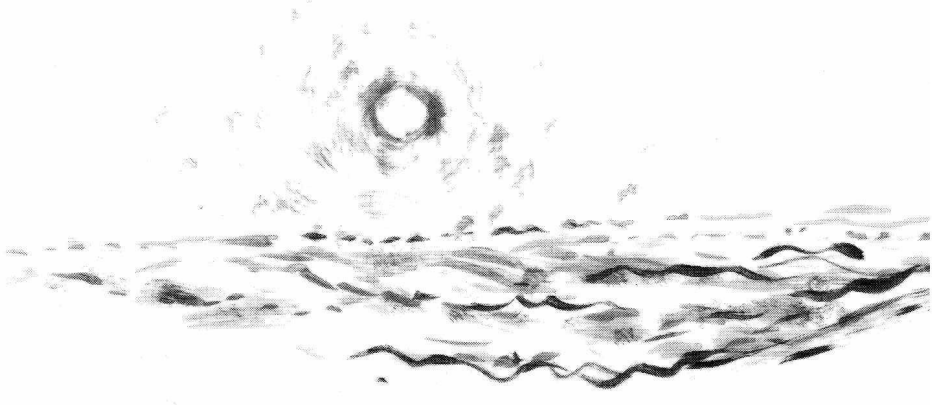
ISBN4-06-195642-6（児一）

もくじ

1 桜並木 5
2 ひっこし 22
3 コーヒーの香り 45
4 カウンター 65
5 テラスハウス 76
6 朝の浜辺 94
7 三つめの約束 111

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

8 決心(けっしん) 123
9 話しあい 140
10 なみだ 149
11 ありがとう 171
12 赤とんぼ 187
あとがき 196



1　桜並木

もうすぐ春休み！

桜並木の下を歩きながら、沙知の胸ははずんでいた。小さい子どもみたいに、スキップだってしたいくらいの気分だ。

きょうで、三学期の授業はおしまい。あしたからは、教室の大そうじや、卒業式や送別会の練習だけになる。そして、一週間もすれば、春休み。お父さんに、旅行につれていってもらえるかもしれない。もし旅行がだめでも、がっかりするのはよそう。お休みがおわれば新学年で、六年生になる。こんどこそ、親友の京子といっしょのクラスになれそうな予感がする。

……とにかく、たのしいことばっかり。

〈ああ、うれしい！〉

沙知が、ほんとにトンッと一つスキップをすると、となりを歩いていた京子があきれた顔で見て、それからくすっとわらった。

原田沙知と親友の藤井京子。ふたりとも、さくら学園小学部の五年生。おかっぱ頭の沙知とポニーテールの京子。背は、沙知のほうがすこし高い。セーラー型の制服は、色の白い京子と、お父さんゆずりで小麦色の顔の沙知のどちらにも、よくにあっている。

ふたりが、六十メートルもつづく並木道の半分まできたとき、風が枝を鳴らし、ついでに沙知の髪の毛をくすぐってとおりすぎた。

〈あっ。〉

沙知は足をとめた。

風にやさしいにおいがする。

立ちどまったまま、あたりを見まわす。……おひさまの光がやわらかい。そして……。頭の上の桜の枝を見て、沙知はもういちど、〈あっ。〉と目を見はった。

「つぼみ、ふくらんでるっ。」

こんどは、声にだしていったので、京子がびっくりしてふりむいた。

「どうしたの、沙知？」

「ほら、桜のつぼみ。」

京子は、沙知のところまでもどってくると、いっしょにこずえを見あげた。

「ほんとだ。そうか。もう、春だもんね。」

ついこのあいだまで、はだかんぼうで寒そうだった木の枝に、ぽつんぽつんと、小さなつぼみがついて、ピンク色にふくらんでいる。

小学部から高等部までの私立学校、さくら学園名物の桜並木。沙知のおばあさまが女学生だったころからあったという、桜並木。毎年、もうすこしたつと、満開の花が、まるで白い雲の上の世界のようになる。

すこしのあいだ、ふたりはそのまま、木の枝を見あげていた。

「この枝だけで、つぼみ三十二。あっ、首がいたくなってきた。」

沙知が、こくんこくんと、首を横にふった。

「あたしも。」

ふたりは、また歩きだした。

「沙知、春休みはどっかいくの？」

「うん。まだわかんないけど、あたしの希望としては、お父さんがスケッチ旅行にいくなら、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ついていきたいな、って。」
沙知のお父さんは、イラストレーター。家でポスターをかいたり、本のさし絵や表紙をかいたりする仕事をしている。
「ふーん。いけるといいわね。」
「うん。」
どことなく春のにおいのする風のなかを、駅まで歩いて、改札口をとおると、沙知と京子は、「じゃあね。」と手をふりあった。京子は、沙知と反対方向の電車にのる。
階段をおりると、ちょうどホームにはいってきた電車に、沙知はぽんっととびのった。うしろから、中学部の人も三人のってきた。
あと一年たてば、あの制服になる……。沙知は、ドアのそばによりかかって、三人の先輩をながめた。
中学部と高等部の制服はチェックのスーツで、とてもおしゃれっぽい。あたたかい日は、スーツの上着のかわりに、かわいいベストを着ることもできる。……来年は、わたしも、あれ着るんだ。にあうといいな。
気がつくと、電車は二つめのS駅をとおりすぎるところだった。……お母さんのお店、いま

ごろはこんでいるのかな。

沙知のお母さんは、S駅のそばで、小さなコーヒー店『きたざわ』をやっている。『きたざわ』は、むかし、お母さんのお父さん、つまり、北沢のおじいさんがやっていたお店だ。お父さんとお母さんが結婚してすぐ、おじいさんが亡くなって、お母さんがあとをひきついだらしい。

そんなわけで、日曜日のほかは、お母さんは毎日お店にでかけてしまう。営業時間は十一時から七時までだから、朝は沙知を見送ってくれるけれど、夜、家に帰ってくるのはいつも八時ごろだ。沙知の帰りを待っていてくれるのは、お父さん。沙知がものごころついてからずっとそうだった。

だから、沙知はお父さんっ子だ。小さいころは、毎日、家で仕事をしているお父さんのそばで、絵をかいたり、おり紙をしたりして遊んだ。おやつもお父さんと食べた。小学生になると、紅茶をいれて、仕事をしているお父さんのつくえまで持っていく係になった。そして、それがとてもうれしかった。

夕ごはんは、朝、お母さんが作ってからでかける日もあれば、沙知とお父さんで、夕方、買い物にいって、お父さんが作る日もあった。

ときたま、バスにのって、お父さんのお母さん、つまりおばあさまがきてくれると、お父さんと沙知は大よろこびで、おばあさまが持ってきてくれたお重箱につまっているごちそうを食べた。小さかった沙知は、おばあさまが毎日きてくれればいいのに、と思ったりした。

でも、いまでは、沙知もちょっとしたお料理なら作れるようになって、週の三日はお母さん、あとの三日はお父さんと沙知のお当番、ときまっている。お父さんとふたりで作って食べる夕ごはんは、けっこうたのしくておいしい。お母さんも、お店から帰ると、沙知たちの作ったものを、「おいしい、おいしい。」と食べてくれる。そんなときのお母さんは、まるで子どもみたいだ。お父さんにいわせると、お母さんは、とてもわかいときに結婚して、それからもずっと仕事をつづけているので、いまだに、ふつうのお母さんらしくなっていないそうだ。つまり、お母さんとしてはすこしばかりたよりない……。

きょうは、お父さんと沙知が作る日だ。

S駅から沙知たちの住むマンションのあるT駅まで、二駅のあいだに、沙知は、今晩のメニューは、ちょっとこった野菜スープとハンバーグにしようと考えていた。でも、もしかしたら、お父さんが、もうなにか作りはじめていて、いいにおいがしているかもしれない。

「ただいまっ。」

かぎのかかっていない、入り口のドアをあけると、家のなかはやけに静かで、ざんねんながらお料理のにおいはしていなかった。かわりにぷーんと油絵の具のにおいがした。お父さんの部屋のドアがあいているっていうことだ。

沙知の大すきなにおい。いつだったか、遊びにきた京子が、

「あっ、サラダオイルのにおい。」

といった。にているかもしれない。ちょっとはなをひくひくっとさせたくなるような、いいにおいだ。

「お父さん、……いる？」

「……いる。」

「なあんだ。いないのかと思った。」

ほっとして、沙知は自分のつくえの上にランドセルをおくと、思ったとおりドアがあけはなしたままになっているお父さんのアトリエにはいった。

そして、はっとした。

「どうしたの？」

ぼさぼさ髪のお父さんが、ぼんやりといすにすわって、ジーパンの足を組んでいた。お父さ

んの髪がぼさぼさなのは、指をつっこむからで、なにか考えごとをしていた証拠だ。ぼんやりしているのに、なんだか、まるいメガネのおくの目だけが、きらきらしている感じがした。そして、つくえの上には、いつものように紙やエンピツや、消しゴムや絵の具のかわりに、見なれない外国の地図が、でーんとひろげられていた。

なにかあるな。沙知は思った。

なにかある。この地図に関係あること。それも、お父さんにとって、かなりだいじなことがなにかおこったんだ。

「お父さんっ。」

「ん？　ああ、おかえり。」

やっといま、気がついたの？　やっぱり、おかしい。

「お父さん。なにかあったの？」

「うん。あったんだ。」

「すごいこと？」

「うん。かなり、すごい。」

「いいこと？」

「……最高さ。」

お父さんのつぶやくようないいかたは、にぎやかにわらいながらいうより、ずっとすごく感じられて、沙知はどきっとした。ほんとうに、最高にいいことなんだ。

「なんなの？　どうしたの？」

「うん。あのな……。」

いいかけて、お父さんはふっとだまった。

「ごめん、沙知。あとにする。夜、由佳が帰ってきてからにするよ。」

「うん。」

由佳というのは、お母さんの名前。お父さんとお母さんは、むかしからずっと、名前でよびあっている。沙知は、ほんとうはすっごくききたかった。でも、お父さんは、お母さんが帰ってきてからって。しかたがない。いつもわが家では、だいじなことは三人そろったときに話すことにしているんだから。それにしても、お父さんが、こんなにぼんやりするほどすごいこと……。いったいなんだろう。やっぱり、ちょっとでもはやくききたい。

「お店に電話かけちゃおか。はやく帰ってきて、って。」

「だめだよ。それほどのことじゃない。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com